
第貳百七十五號

鍋島　直大　　津輕　承昭
大谷　光尊　　宮地　嚴夫
北郷　久政　　小出　粲
千葉　胤明　　岩崎　勝從
蜂須賀隨子　　鍋島　榮子
前田　朗子　　西四辻茂子
岩崎　寧子　　小川　直子
常盤井文子　　中村　禮子
服部　磯子　　河村　重子

明治三十四年三月十九日印刷
明治三十四年三月二十日發行

編輯兼發行人　川崎直衛
印刷人　並木頁雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發賣元　靜思館
（電話本局一千三百七番）

處置　振假名付　正價金貳拾錢　郵税金四錢

婦人會教程　振假名付　正價金參拾五錢　郵税金六錢

教程（看護婦教科書）　正價金壹圓　郵税金拾錢

人教科書　正價金六拾五錢　郵税金八錢

り先あるは寧し身體の健康は育兒衛生に始まり一家衛生に中にし公衆しと雖も之を行ふに法ありて其法を教ふるの良書世に乏しきが爲め知するもの縣て數ふべからず是蓋に個人の不利のみならず抑亦國家の一

足立寛先生、日本赤十字社篤志看護婦人會に講師として會員に講授せ





●廿二金三匁五分肉彫象嵌
ダイヤモンド入
甲価 二百五十圓
乙価 百八十圓
丙価 百三十圓
丁価 九十圓
戊価 六十五圓
己価 五十圓

●廿金三匁付 小判形 角形 無地印面指環
十五圓七十錢

●廿二金四匁付 小判形 角形 無地印面指環
〃 廿二圓四十錢

●純金五匁付 小判形 角形 無地印

●廿二金二匁五分片切彫刻
甲価 十九圓
乙価 十七圓

●十八金三匁付蝶番付三ッ折片切彫刻
甲価 廿圓
乙価 十七圓五十錢

●廿金三匁付蝶番付三ッ折平象嵌片切彫刻付
甲価 廿三圓
乙価 廿圓

◎印材製作篆刻
應貴囑

右の外金量の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精粗により代價に高低の品種々あり

金屬美術品商

衛門

電話本局三十三番
長距離電話接續



五
[illegible]

唯、其の義を失はむことを惜み、吝者は、其の義の財を失はむことを惜む。其の心性の所向、一は、は人生の骨髄なり。之を棄てゝ、唯、財にのみ随ふ容れられざること、固より、其の分あり。これ、節今、近く例をとりて、之を言はゞ、菓子、玩具等をずして、人の窮乏を救ふためには、一銭をも惜みて衣食等は、分に過ぐるに、人に對する贈物等は、は

人は見る所なり。抑 鉅萬は、一銭一厘の集合にしせしものに外ならず。されば、深く其の意を悟り、常日、諸事諸物に就き、十分を極めず、勉めて、簡素に節し、久しきに彌りて怠らざるやうに勉むべきなり。



年に達するまで、父母の助力を仰ぐを以て、父母たるものは、子孫を養育して、完全に獨立せしむる本分を盡さゞるべからず。されど、母若くして世を去り、可憐の緑児を、他人の手に委ぬる例



田眞佐子

有せんか。理
孫その人の體
されど、單に、
せず、國家の
立ちてこそ、

たるものは　子孫を養育して　完全に獨立もしむ
る本分を盡さゞるべからず。されど、母若くして
世を去り、可憐の緑兒を、他人の手に委ぬる例あ
り。亦、たとひ、母存命せんも、早衰して育兒の
任に堪へざるため、子女に、充分なる保護を與ふ
ること能はず、敎育も加ふること能はざる例あり。
誠に、婦人生涯の遺憾は、をさ〳〵、これに過ぐる
ものあらじ。
これに反して、親たるもの世に長らへて、愛兒を
おもひのまゝに養育し、敢て、外より侮を受け
ざるばかりに立身せしめんか。親たるものゝ心中、

り、臂薄く、體
ら、國家に對し、
が、婦人の早衰
は、國家のため、
調はざるは更な
大なるを以て、
かざるべからず。

れより、早衰して、遊惰に年月を送るとせんか。婦人の世に貢献する成蹟は、知るべきなり。況んや、早衰して世を去るは更なり、たとひ、朝露の今にも消えんとするばかりの身體を以て、死期を待つは、果かなきわざならずや。甚しきは、早衰のため、耳も聞えず、目も見えずして、本意あらずも、人事に遠かり、世外の人となるは、徒らに世に寄食する觀あるを、誰か潔とせん。故

十歲にな陷りて。
體質なれども、
り。既に、六十
言はず、故々、

言語は、その人々によりて、獨立的に作り出さる
る者なりとの議論は、如何といふに、是、亦、容
易く敗れぬべきなり。
若、此の議論の意ぶ、

質なれども、。既に、六十はず、孜々、後の愉快とせなるを思ひて

口語

情

晨

る者なりとの議論は、如何といふに、是、亦、容易く敗れぬべきなり。

若、此の議論の意が、人々に、その祖先等より一の体質をうけ繼ぐものにして、その体質は、やがて、それらの人々をして、知らず〳〵、其の祖先等と同一の言語を發達せしむるに至るとの意ならむか。其は、實に前章にいへる遺傳說と同一に歸すべく、その論據は、既にとるに足らざるなり。

若、又、其の意が、同社會の人々の間には、智力上の組織の一樣に似たるありて、彼等は、是が爲て、相一致せる言辭の系統を組立つるに至る者な

…得るに至
兒童の能力の
論ずる能はずと
解し得るなり。
…知らざる可ら
ざるなり。即それ
…人々、または、
…種の性質及行

とする。單なる生れながらの心のはたらきによ
り、一部は、その傍にありて、音響を發する人々
を摸倣するより出づ。(孤獨の中に育てられたる小
兒は、比較的沈默ならむ。)此の體力の働く順序は、
全く、手の運動をあらはすと同樣なり。生後、殆六
ケ月の間は、兒童は、たゞ、其の手をみだりに振
り動かすのみにて、如何にすべきか、または、何
故に然するかといふ事を知らざるなり。然れども、

…驚かしめ、遂
…力の及ぶ限のも
…るに至る。發
…る時期は、こ

兒童にとりてをや。兒童は、一組の音が一の事物
に屬し、その事物をあらはすといふ觀念を、たや
すく了解する能はざる事は、少しく、年長けて後、
一連の文字が一の詞をあらはすといふ觀念を得か

の及ぶ限のもるに至る。發る時期は、こば、兒童は少べき動作を摸其の通りの態に先だちて、物を見て、之を知れるな、幾度もその、その名を以

に慰し、その事物をあらはすといふ觀念をたすく了解する能はざる事は、少しく、年長けて後、一連の文字が一の詞をあらはすといふ觀念を得がたきよりも、一層甚しきなり。されど、名と物とは、幾度も結付られ、その結合は、幾度も明白に示さるゝにより遂によく、之を知り得るに至る事は、宛も、砂糖を味の甘きものなりと知り、鞭をばその非行を罰する具として知りうるに至るが如し。而して、兒童は、その名を呼び始むる久しき以前より、斯る名のものは、斯る物なりとの事を知り始むるなり。其の次には、平生きゝ慣れた

貴賤老幼男女の別あるものにあらず。然るを、今、茲に、女子修身の必要を説く所以のものは、女子に於いては、男子よりも、更に、必要なるべき理由の存するに由れり。さて、其の理由如何といふに、男子は、社會萬般の業務に當るを以つて、其の功を以つて、過を補ふことを得べし。これ、所謂、大行は細瑾を顧みずと曰へる古語の如く、偉大の事業を爲すものは、其の勢、自、小廉曲瑾

し、其の私行上
然るに、女子に
の補助を爲すに

其の故は、女子は、成長して嫁期に至る時は、良縁を求めて、結婚の禮を擧げざるべからず。其の最早き者は、十四五の年齢より、已に此の事あり。

に、女子に
助を爲すに
して、偉大なる
なく、從ふ
あらず。其
は、社會の
遂には、人
男子は、少
或は、怠惰
し、大に奮勵
學藝を勉め

縁を求めて、結婚の禮を擧げざるべからず。其の最早き者は、十四五の年齢より、已に此の事あり。其の良縁を求むるに方り、男子の方には、其の父兄親戚より、聞合といふことありて、縁女の品行才藝等、精密に探訪するを常とす。此の如く、精密に探訪するは、實に、當然の事にして、終身の配偶を定むることなれば、愼重に愼重を加ふること、固より、已むを得ざるに出づ。啻に、男子の方より、女子の方を探訪するのみにあらず。女子の方より、男子の方を探訪することも、亦、同樣ありとす。然らば、此の一點に於いては、女子修

りと斷定する
あることもある
れども、この曖
播するときは、
似の件を必無の
りと假定するこ
たる頃、評議に
へ問はず、品行

疑を遠ぐるの方
、疑似の說も生
社會に處して、
端主義

題の著すると　平等の道理なくき方に構もれと
も、前述の次第なるを以つて、殊に、女子の細行
を苛酷に論ずるも、亦、己むことを得ざるに出づ
る所以なきにあらず。我が國、古來、中等以上の
社會に在りては、女子は、深窻の內に養はれ、勉
めて、嫌疑を遠くる　風習ありしが、近年に及び
ては、其の風習、やうやく變遷し、支那朝鮮の女
子の如き、閉居主義を用ゐずして、歐米の如き交

ること數十年、遂に、その身を終ふるまで諭らざ
りきといふ。
子なかりければ、他の女を養ひて聟をむかへしが

疑似の説も生
質に處して、
壯靜肅にして
む所あり。

一

三郎

に、すゑとい
りるが、姑に
く…

りきといふ。

子なかりければ、他の女を養ひて聟をむかへしが、それらの人々をいつくしみ訓ふることも、亦、なほざりならず。あつぱれ人に模範とせらるゝまでに、養ひたてぬ。老いても、いと健にて、若き人人と野山の業にも出でたりしが、猶いとまあれば知れる人の田畑の草などさへくさぎりなどしけり。田畠のあるじ、或は、この人のわざならむとて、禮いふもあれば、とかく言ひなして、うけざりきとぞ。

くて、近きあたりにすめる人の父祖、其の他の忌



女ばうと申すは、まづ、上下によらず、こゝろにて候。のどかに、らう〳〵しく、思ふことをしのび、あらまほしきふし〴〵をかんにんして、さすがに、うきをも、また、うれしきをも深う思ひ知りて、その事となくとも、とあり斯からん折々、けぢめをも人のおもひしるけにみせて、あわたゝしからず、さすがに、はえ〴〵しく、おほどかならんぞ、よき人とは申し侍りし。

どろ〳〵しく御
かなるやうに、
よそ、眉をぞ、

四 はなのこと

はなは、顔のうちに、すぐれてたかきものにて、めだつことなり。かまへてかまへて、とりわけ、
目

つ〳〵しく御
なるやうに、
て、眉などは、
めぬるとき、
ゆとは云ひそ
侍るとぞ聞き

るものにて、
ものにて候ふ

はなは、顔のうちに、すぐれてたかきものにて、めだつことあり。かまへてかまへて、とりわけ、白くなど御化粧候ふまじく候。さしいで、みにくきこと多く候ふなり。

五　くちのこと

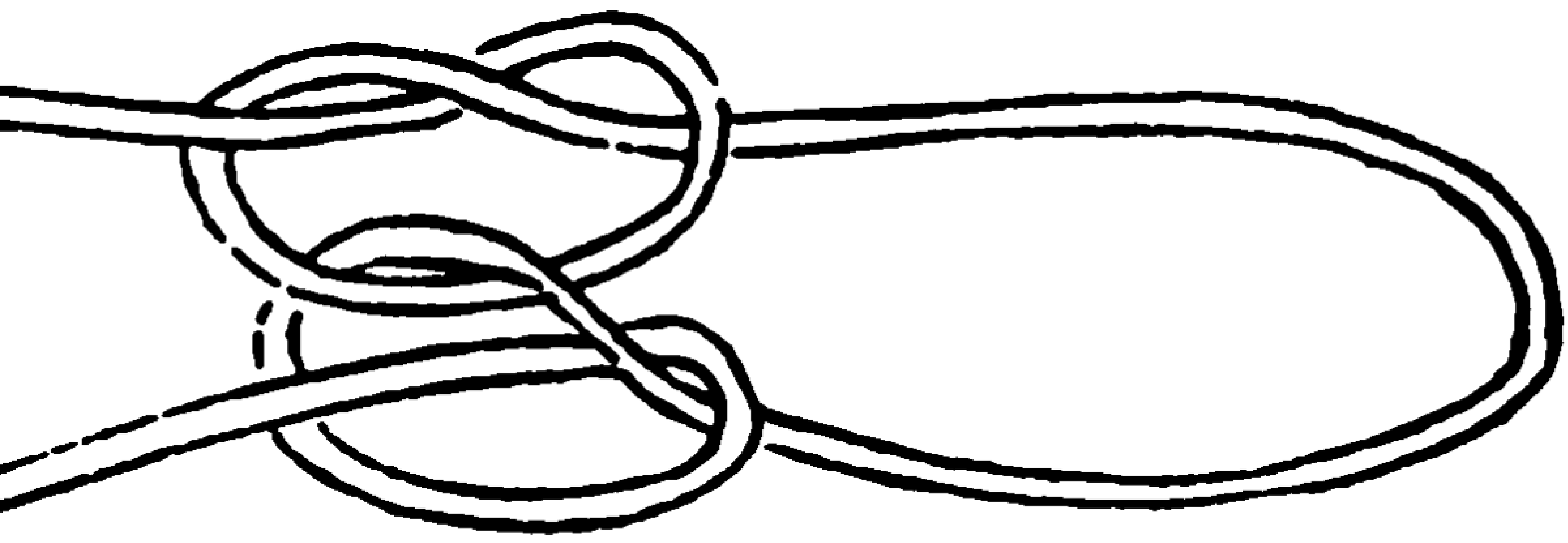
御くちつき、よくもあしくも、おもふことを言ひわらふとて、口わきより沫たりて、のどのおく、つねに、ひろしき人も、わいなう轉あるものにて候。のこり多う、言葉すくなく、さるからに、舌にかけて、わけもきこえぬやうなるは、みぐるし

とも角總とも
さま〴〵の香
けて、佛に奉
じを記せり。
右の手にて紐
して、左の紐
て、其の紐の

紐の組あはせたる所を取りて、右の方へと打返
して、眞中を輪組違になすべし。かくすれば、
右の左と、紐の掛様同じからずなるなり。次に、
左右の紐の間々より、一二の指を双方より入れ
て、互に、眞中の輪形の端々を引出して、形を
とゝのふべし。

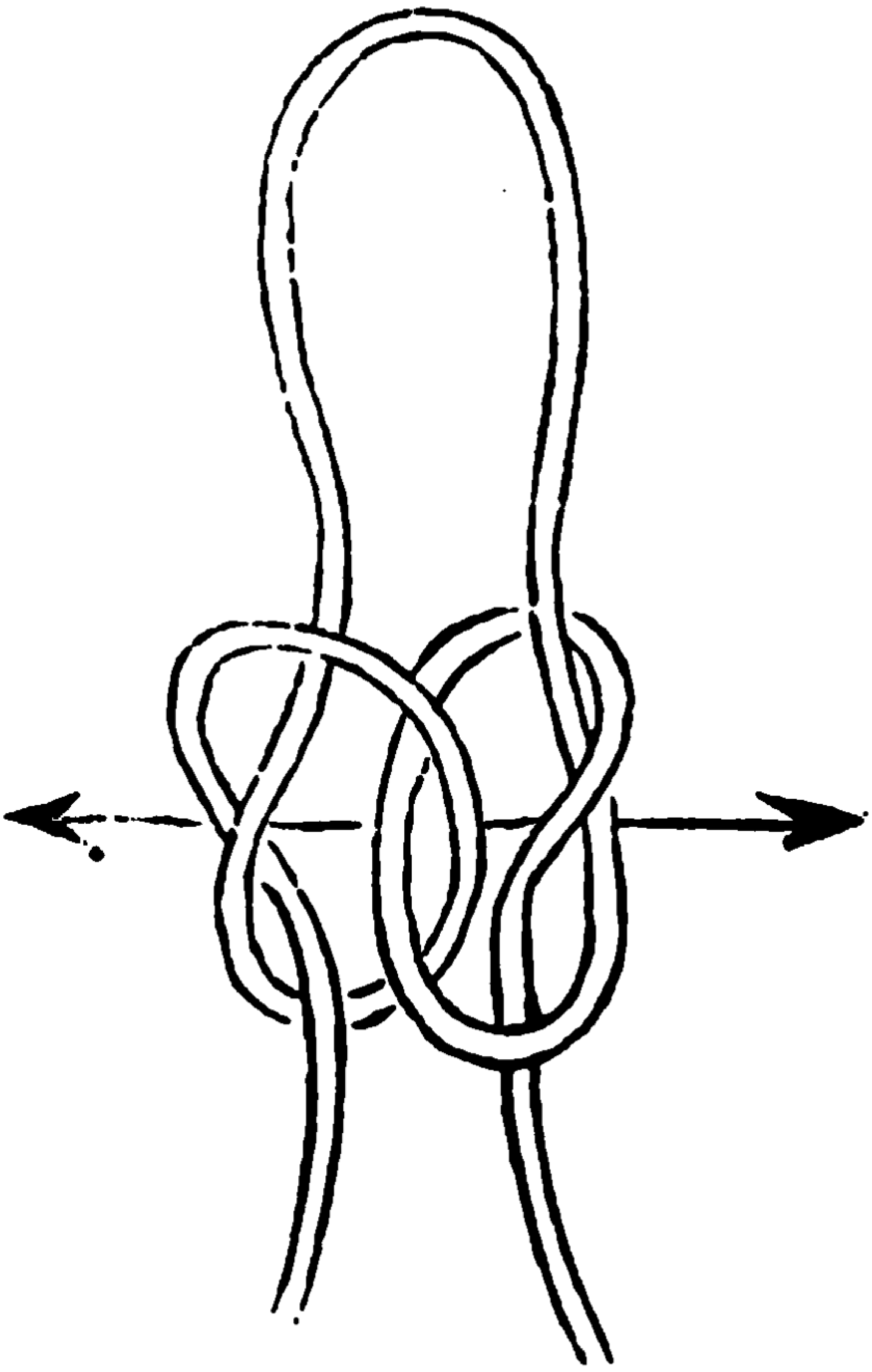
第五圖

第四圖



第





第五圖

茶闘葦雄註釋

佐々木道譽な
利休居士の時に

挽茶を賜る等の
ある事は勿論な
しにはあらざる

判然することなたはず、御一覧の識者方の内にて、若、又、御案内あらば、御通知を願升。偖は、本文へ取掛り升れば、往古は茶會といへり。太平記の佐々木道譽など茶會を催すと云ふ事ありと。此の時代のことは、茶會といふ名義を唱ふる以上は、多少、式ありたるも知るべからず。又、煎抹の區別も如何にか、唯、想像に止るのみ。古くは、大内にも、挽茶の節會、又は、御

て、茶の湯と定む。佛家の奠茶奠湯と云ふ貴重の大法會を執行する時に、佛前供養に茶を捧げ、白湯を捧ると云ふ茶の湯も、則、客に對し、湯

る事は勿論な
にはあらざる
名稱の行はる
際、酋、軍事
略をも議した
時に時間を限
ざるべし。次
足利豐太閤
一新し、足利
に至りては、

の大法會を執行する時に、佛前供養に茶を捧げ、白湯を捧ると云ふ茶の湯も、則、客に對し、湯を呑しめ、茶を喫せしむると云ひたるものにて、兩居士の卓見、千歳に通して動かすべからず、敬伏と云ふの外、一辭を容ることを免さず。再三感佩す。

葱頭(玉葱)の栽培

近藤隆

、其の栽培手
交りの土地、又
其の故は、斯
み肥大となり、
成熟期さへ後
されば、宜し
雨の爲めに土の

整地すべし。故に其の前作（即ち秋作）には、胡蘿蔔、大根等の如き、草除り、耕鋤を度々なすべき作物を栽うるを便なりとす。秋作を収めたる後には、能く耕して、寒氣に曝し、春に至り、四五寸の深さに耙耮し、土壤の膨軟となれるに及び、肥料を施し下種すべし。

肥料は、原肥として下肥五十〆、堆肥百〆より百五十〆、藁灰五〆より十〆、第一追肥として下肥

割合にて施用す
肥は、充分に腐
肥（鯡粕其の他）

に撒くべし。尤も、意を留むべきは、幼芽の草除なりとす。秋季に至りて、生長も止み、其の莖葉黄色を呈して、萎むて至らば、之、采収の

は、充分に腐
緋粕其の他）
燐等を、適宜
根を得べし。
料に接せしむ
從ひて、其の

る者を選ぶべ
を示すものな
らず（圃地に

なりとす。秋季に至りて、生長も止み、其の莖葉黄色を呈して、萎むに至らば、之、採收の適徴なり。此の時に至り、或は、採收を猶豫せば、雨などの爲めに、再び生長し始むることあり。先つ、收穫に堪ふるに至るは、八月下旬より十月中旬の間なり。球根は、手にて枯葉を引けば、容易に地より離るべし。之は三四日の間、日光にて十分乾燥し、莖葉を去り、其の後も注意して、乾ける處に貯ふる時は、翌年五月頃迄は安全なり。或は寒冷なる處にては、凍ゆることあれば、窖の如き

其の種類固有
の流通よき處
より一尺の距離
出で、花球を
を竹類にて支
付て、便宜切り
し。

きも、一種の

に、予の幸のみあらず、實に、國家の幸ありと信ず。何となれば、家庭の上に、尤も留意すべきは、衛生問題にして、然かも其の基本は、食品問題にあればなり。



馬鈴薯の、皮を去り、能く洗ひ、鍋にいれ、昆布を加へて湯煮し、細き串を、試みに通し、容易に通りたれば、湯を流し、昆布を、鍋の底に敷き、馬

へいれ、灰汁
りて、食塩を
、くづしたる
加へ、能く徠
、別の鍋に、
ける頃、牛肉

を加へて湯煮し、細き串を、試みに通し、容易に通りたれば、湯を流し、昆布を、鍋の底に敷き、馬鈴薯をのせ食塩をふり、蓋を能くして、文火にて、暫く蒸し、牛酪を附て、食す。味ひ、美あり。

同淡雪

馬鈴薯を、丸煮の如く、煮上げ、熱の冷めざるところを、裏漉にて、こし裏へ、軽く雪の如くありて出でたる時、これを、匕にて、静にとり、「ビフテキ」又は、肉類煮たるものに、添へて、用ゐるべし。

一

類文

りは、人々もた

と、あを色は、

は、青色の地紙

地紙には、綠の

を、月のあかきに、見わたしたるこゝちしつつ、きら〳〵と、見わたされず、かゞみをかけたるやうなり。

と、見え、

また、枕草紙に

「扇の骨は、」と、ある條に、

あを色は、赤き、

紫は　みどり

と見えたるなどを以ても、いかに心を用ゐる

を附して、薄墨にて畫き、後、花心子房、並に、

表裏の葉は、皆濃墨にて線を入るゝなり。

また、彩色にて畫くには、花

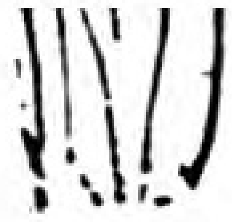
靑色の地紙
紙には、綠の

償の景色など
わざとおもし
は持ちてはこ

表裏の葉は、皆濃墨にて線を入るゝあり。

また、彩色にて畫くには、花は藍にて描き、乾きて後、少しばかりの白郡青を使用すへし。花心は、雌黄にて胡粉をときたるものにて畫く。子房は、黄がちの青色にして、莖は、黄がちの青色に、胭脂を挾墨となし。葉は、表は藍かちの青色、裏は莖と同じき黄かちの青色に、紅色を片端に附して、畫くあり。然して、葉の表なるものと子房の線とは、濃墨か藍墨かなれども、裏葉の線は、紅色にて入るゝあり。









第壹圖寫生葉脈



に　大概打
て參らすべし。
時宜により、
參らす事あら
る品を居ゑた
左の掌へ要を
へ、竪様にし

り、筆のさや
貴人の御右へ

きて内冑をうけたるがよきなり。

一、料紙硯箱を參らするに、料紙を右の手にて、硯箱の右の下へとりそへて參るべし。料紙もし卷紙などにてあらば、硯箱の蓋を仰のけて、中へ入れて參るべし。貴人の御右へよりて下に置き、ふたをとりあふのけて、硯箱の左へ置き、料紙をその上へ載せ、（但、卷紙ならば、蓋にのせたるまゝ、硯箱の左の方に置くべし。）さて、硯を我の方

しんをはさむ事もあれど、まづは、代蠟燭にてねきかへたるがよろしきなり。

一、手燭を持ち先立する時、

貴人の御右へ
足一つを上坐
足一つを客
を床の間のか
をば、左方の
足の半より上
ものは、盤と
すに持ちて參
の盤を持出し

きかへたるがよろしきなり。
一、手燭を持ち先立する時、客の左へより、燭を客の前にさし出し、我が影にならぬ様にすべし。

あそびぐさ

著者不詳

○ひとは、まづ、そのわがこゝろのよきにうつらんことをこそ、きはめて、つねのねがひとせめ。こゝろは、みのあるじぞかし。きよきこゝろを、

る、みなにくま
こゝろのおなじ
ことおほかり。
ゝろをすつるの
ひとは、その
なり。
ことはざかるこゝ
こおほかり。こ
みちなければ、
きのふくらか

あめがしたにもかふべからず。しかはあれど、み
ちのためには、これをすつることつねなり。こまか
にあぢはひて、ふかくとほりなば、みちにしく
はあらじ。
○あめがした、みちなからんにも、たのしきこと
なきにはあらじ。おのれだにみちあらば、いかで
か、これをたのしまざらん。ほかには、また、を
りをまつことと、かぎりをなすべからず。いくよ

○いのちは、これ、こゝろをうるのそなへぞかし。
をいぬるすがたを、うれふることなかれ。こゝ
ろのくるしきこと

とのふくらか
、いのちの
ぬことを、
ゑならんか
らまざるは
ひをはれて
らまほしき。

をいぬるすがたを、うれふることなかれ。こゝろのくるしきにをはらんことを、うれへざるべけんや。

○かたちは、かならず、さきにかえて、こゝろはのちにひらくるものなり。ねがはゞ、つひに、くらきをいでん。あきらかなれば、つねに、たのしうして、せまりくるとき、かならずやすし。

○いへは、かならず、むつまじきことをさきにして、あらたむることをのちにせなん。あながちに、あらたためんとすれば、さかひやぶるゝこ

して、ゆくとこ
はさにゆくなり。
いかでか、みち
すゝまざりせ

の諸般の問題を
稱するなり。而
らざるよ、眞て

佛國巴理には、婦人の一手にて經營せらるゝ新聞あり。英獨等にも、亦、多少の婦人記者あり。然れ共、米國の如く、其の數多く其の勢力の盛大なるはあらざるなり。米國の婦人記者には、畫工、探訪、小說、論說等の凡ゆる記者を含有し、何れの新聞社員名簿を見るも、殆んど、女性新聞記者あらざるなし。而も、此等の婦人記者は、各新聞社に於て、婦人局なる一部に割據し、紙上の婦人

職其の他數十の女史、各得意の方面に、世の
目を牽けり。
新聞

するあり。而
ざるは、眞に
多く、寄書
婦人に關する
相を研究し、
し、或は、流
を說き、或
い、之を平素
性は、其の有

目を牽けり。新聞社にては、政治、經濟、戰爭の如き大問題の起る毎に、男子の探訪、通信員を特派すると共に亦、女子の探訪通信員を差遣し、其の紙面には男性特派員の報道と並べて「何々事件に於ける女性の觀察」として特標し、大に讀者の歡心を收めむとす。而も、兩性間の觀察には兩樣の趣味あり。淡濃厲温相待つて滿紙の花となる。今、左に此等婦人記者の行動の一班を揭げむ。

例へば、某地に大火あり。災後の慘狀を探究せん

に、地方の一問
し、問題の初に
贓あり。此に於
醜業婦に扮せし
吏に、警官に捕
此に於て、獄
に處する是非を
し、往々平地に

からはさず。
一卷

女誡俚言

著者は倉次亘約とあれど、その傳は未だ詳ならず。此の書は、後漢曹大家の女誡七篇を、俚言にて注解せし者なること、その書名の如し。嘉永五年清水謙光の序あり。

女式（繪入）　二卷

松會開板とありて刊行の年月なし。標題には女式目と有り。女訓のことを物語体に書きたり。

著者詳ならず。寛政十三年の刊行なり。目録は第一卷相生部、第二卷婚姻守本尊、第

一巻
らざる罪をも
我ともがらの
こし侍る。む
を書つゞりた
つけ侍るもの
中村弘毅序
の外、通論一
たり。又上頭
ちて、和漢女

録は第一巻相生部、第二巻婚姻守本尊、第三巻干支之部、第四巻月日之部、第五巻時児之部等あり。勿論俗説のみ書きたるものなり。

千代茂登草　一巻

藤原惺窩の著なり。惺窩名を肅といひ、参議冷泉為純の子なり。當時天下麻の如く亂れ、文學の業廢絶せしこと殆ど四百年、惺窩この倉皇の際に成長し、流俗の間に特起して、始めて程朱の學を講ず。實に江戸文運の首唱者たり。徳川家康頻に召せども應せず、門人林羅山を薦む。

忌辰錄には、
記せり。さて此忌辰錄の說なら
るべき事がらを
集に入りたり。
沿の解、佳節由
和歌三神之圖、

つけ侍りしは、
に、かくいへり
は見て

庭訓等、甚た多しといふ。

この書は、算の九九の聲を句の頭にして、一々、敎訓の歌を作り、稚兒に算法を習はしむる傍、敎訓を兼たるおとけなきものなり。例へば『二二が四、しばしとて由斷をすれば跡へもどるさかに車や手習の道』などの如し。上段には、歌の意によりて女の心得種々かき記せり。

女鏡秘傳書　三卷六册

せり。

第三卷凡四十七條

ん得りしは
かくいへり
見たまふ鏡と
も見給ひゆだ
ひだゆヽしく
。作者及著作
ものにはあら
始め、女のつ
服の事、粧飾

せり

第三巻凡四十七條

この巻には、懐妊出産の事より子を育つる事、食事作法の事等、大概、家母としての心得を記せり。

女撰要和國織（繪入）　一巻

著者木敬寛とあり。その傳は詳ならず。目錄は、女八大家、女不斷敎草、七小町物語、本朝女鏡、女中風俗品定、婚禮圖式、年中行事等標目なほ多し。毎葉繪あり。

若余彦神の尊と
扱たらし姫の御
詠み奉れるが如
のみはいふべく
のたゝへて、神
さ。大日本彦耜
本根子彦太瓊天
りてきこゆべし

しこゝろを
其の詞ながら、

の命から國をむけたひらげて云云。また、たらし姫神のみことの魚つらす云云。御名をたゝへたてまつらむには、かくてこそまをすべけれ。さるを餘る光をたらし姫など、あめにかしこきいひざまならずや。四句から國とはなどいはざりけむ。結句もよろしからず。たらしましけむといふべきをや。

日本武尊

御歌の歌は、其の事實の勢と詞の勢と相應せずば、見處なきものなり。此の時、御船將に覆没すべき際にして、

こゝろを
の詞ながら、
いふげなどの
りくおきて、
上梟帥が奉
る心といふ御
よろしきは、
ともいはむ。
なくていひか

ずば、見處なきものなり。此の時、御船將に
覆沒すべき際にて、御命を捨てたまへることな
れば、きはめて烈しくいふべきを、八重盤は安
席なれば、おのづから、句勢ゆるくて相應せず。
さはいへ、此の作者の分際、かく深くいふべき
ならねば、さてあるべけれど、初學の爲に、
驚しおくなり。

曲亭馬琴が眼中に映ずる

小さ、二三十の錢さ
づ夫の安否を問ひ、
を誂へなどしつ、
行末こしかたを語
思ひしかば、こゝ
は、夫の睡れるを
被け、お通を掻き
て、火を乞ひ、粥
いれるを啜りて、終

通は早くもお

折しも九月十八日の月出て、外より寒き山里は、虫の音絶
にて遠砧の槌いそがしくなりまさる、世のいさなみぞ哀れ
なる、さる程に半七は、病みふして、旅の宿を立つことかた
き、躄の、こし路に隣る信濃國、沓掛にくづをれて、われ
から急ぐ冥途の旅、せめて一筆のことばやさ、
彼は、病餘の殘軀、手ふるへて書く事能はざりき。
即ち、一策を案じぬ。即ち、女兒お通が物おぼえ
よきにより、母がかへらば謌ひて聞かせよ、必ずよ
き物賜はらんぞとて、かきをきの事といふ唱歌を

半七は決死の臍を固めたり、餓ゑても忘れぬ兩刀
は、父が紀念の亂燒、亂れぬ武士の魂

通は早くもお
ばば、父は女兒な
顔ば、母がいかば
ば寢よさいふに、
取れど、立つこ
さましてもいら
おもへばますらな
なり、しばらくし
忠義の爲に捨てし
ろ悔しさよ、死せ
怒も解けぬべし、

牛七は決死の臍を固めたり。餓ゑても忘れぬ兩刀は、父が紀念の亂燒、亂れぬ武士の魂をおしいただきて拔き放し、襟くつろぐる折しも、お通はめをさまし、袖にすがりてよゝとなく、聲を聞きてや三勝が、歸り來りて信と見て、あなやと飛びかかりて之を支へぬ。三勝いかでか夫を殺さむ。必死に之を爭ひて、故を聞かでは放ちはせじといふ。故にお通こそしりたれとて、お通をして例のかきおきを唄はしめ。その歌いとあはれに、めでたく作りなしたり。

みすゞかる、しなのゝ國に旅寢して、木曾の梯わたりかれ、

の第一年は來り
而も、此の間
のふことに悔恨
されども、其
常に、同一の悔
ぞかし。嗚呼、
や。
●●●●●●
て居て人を使は

頻に唱へらるゝ

〜

らむが如くにて、あらはれ來り見えずなりゆく人
の姿、車のさまも、いとゞおもしろし。日頃はい
ぶせきものにかぞへつる砲兵工廠の烟筒も今日
は、いとゞかすかにて、うらの方ばかりはの見え
たる、なか〳〵に一しほの趣あり。かの後樂園
の森の樹立の薄墨よりも淡く、夢のやうに見えた
る、いはむ方ぞなきや。日少しいで、梢のみ紅
の色さしたる程、また畫にも筆にもつくし難かる

だ、十をこえて一つか二つあるべし。汚き破衣ま
とひて寒げなり。按摩上下

に唱へらるゝ
題あるべし。
を認むるもの
提出せられ居
はず。婦人の
改良せらるべ
に輕々看過せ
目下諸家の改
ける用意の如

た、十をこえて一つか二つあるべし。汚き破衣まとひて寒げなり。按摩上下といふ聲音も、少しととのはず異樣なるが、中々にあはれ深し。さるを、可笑しとにやあらむ、行過ぎぬる、又は家にある者などのあざみ笑ふ聲す。いとにくし。世には、人の哀をばあざみ笑ふものゝ多きぞうたてき。

〇此の頃リットン卿の小説を讀む中に、面白き左の一節あり。

誰人も、他人の幸福を、はかり得ぬものぞかし。彼の浪の上に照る月を見よ。我等には月はたゞ海の中の一すぢの浪にのみ。その光を惠み

幾百千の健兒を彼のために奪はれたる、鹿兒島の父老は、今猶、西鄕南洲翁の德を、わすれかねて、たま〳〵、其の話が出づることがあると、大方、眉をあげ、腕をさすり、其の人物の大なりしことを稱して、皆、天下人なしの慨をしめす。すでに、わが知れる沖繩縣警視の橋口などいふ人は、醉ふ毎に、自己は嘗つて西鄕殿の手兵五百人中の一人であつたといふことを、はこつてやまないのであ

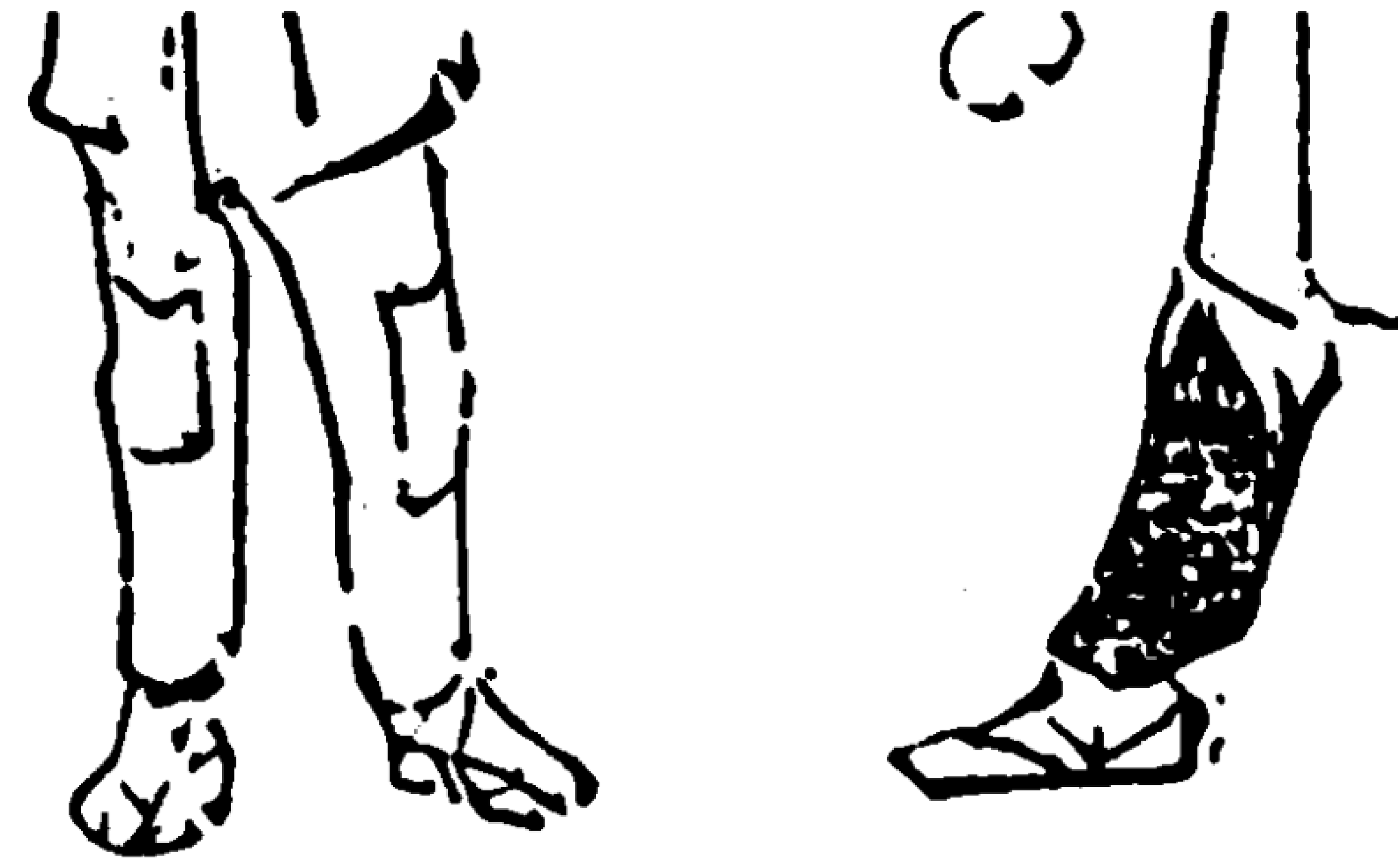
た人の宿屋に
、其は、何で

銅像の如く肥滿して居られたから、長々の行軍
に腿肉ずれして、非常て難儀



人の宿屋に
其は、何で
てるのだと
も言はうも
りをせらる

鐵砲の如く腿痛して居られたから、長々の宿
に腿肉ずれして、非常に難義をせられた様子で
あつた。或る、野原で休んだ時に、翁は煙草道
具を取出したが、さて火がない。少し離れたと
ころに、人足が煙草をのんで居る。もしも其の
火をと聲をかけられたら、非常な名譽と、飛ん
で行て、其の火をさゝげるだらう
に。翁は、なほ、苦痛を堪へて其
の身をおこし、其の人足の所に行
て、其の火を一つと、吸付けて來
て煙草をのまれた。翁は何事にも



されて、わが程のこともありたい、蝟でらんなさいま

幼き人々のために（おとぎばなし）

香谷女史

兎と蝟と競走の話

兎が、亀と競走をした御話は、學校の教師から、前に最早、伺つたでせう。その兎が、こりずま

ところが、兎は、高慢な奴でございますから、このあいさつには返事もせずに、却て、長い耳をふ

…てい、蛸
りんなさいま
ノとする頃の
しながら、
まだ、山の後
の山を、佛様
いさまを、さ
を謠つてをり
みながら、自
そろり〱

ところが　兎は　高慢な奴でございますから、こ
のあいさつには返事もせずに、却て、長い耳をふ
りたてながら、

どうしたんだい。一体。お前たちが、今時分か
ら野をのだくり歩くなんていのは。エイ。

と、さも横柄に、叱付けでもするかの様な調子で。

蛸　私ですか。私は散歩に、います。

と、もとく、大人しい性質ですから、穩當に、
返事をいたしますると、

兎　散歩に。生意氣な。其の曲つた不具の様な足で。
きいた風なことをせうよりは、腐芋の餘殘でも





…に始めやうう…
…は我が家にボ
を飛び回つて居
聞くからッて、
…にえらいもの
まゐりまして、
は今、野で、兎
…顔して、

夫の仰しやることあり、常々、粗忽な事など爲さらん方だから、何か、御考があることだらうと、妻は、支度もそこ／＼に、ついて參りました。

蝸　われ、彼所の、ずーッと長い畑の。ソレ彼の溝を中に右側と左側とにならんで、上手から下手へかけて、兎と僕と競走を爲やうといふのだ。お前は、たゞ、下手の溝端に隱れて居て、兎が其處に往く毎に、草の中から頸を出して、『僕は最早、來て居るよ』と言ひさへすればよいのだ。

して、
りや、
下手（しもて）
がて、



した。今度は眞

。

。

ます。そこで、

いたしました
勝負は決しました。如何な事されても苦しくない
といふ賭でございましたから、蝟は、
この長い耳で、何を聞いたつて、聞く分には悪
くない。たゞ、この口が、むやみに、高慢なつ
まらない事ばかりを言ふからよくないのだ。
と申しました、兎の口唇をかき裂きまして、妻を
ひきつれて歸つたと申すことで御座います。さう
言へば、なるほど、兎の唇は、醜状に、蝟の足

ッて居りますよ。
亦、蝟に智慧

歌人と申すのでは御坐りませんよ。
と、そんな弱手、いひぐさ 歌人な

居りますよ。
蝟に智慧
ふッつり賭
して、今は
たし〳〵。

太　生

吟次よ、日

歌人と申すのでは御坐りませんよ。歌人なんぞと、そんな古手な言草よりは、もそつと、世間體よう聞えるオツト何と申しましたツけ、左樣左樣、詩人と申すものにはなられます。如何で御坐います。與太生の家集を、まづ、ざつと御覧ください。

霜月の末つかた、深更ある横町
をとほりて
たゞ按摩の笛の音すなり霜がれに

せし中に
さりがたし
はゆるかな
、満室の蒼蠅は
らといひし細川
しものあること
。恐惶謹言。
きに斯様

どうやら、棚に
出來あがつたそ

あがめわたして
工場のけぶりこゝにもかしこにも
ロンドンの霧におとるべしやは
今時やまどりの尾のしだりをでも
御座るまいとてよめる
ねばらぬのりそうめんのいとの細いとの
なかぐし路うんざりすらく

註釋、ねばらぬのりは、そうめんの枕詞に

ける中に、鐵道といふ題を
くろがねの

やら、糊に
わがつたそ
り氣なき故、
と妙案なら
家集を註釋
は、法（ノリ）
を見おとす
之をいはず。
にて仕方な
したる邊、

ける中に、鐵道といふ題を

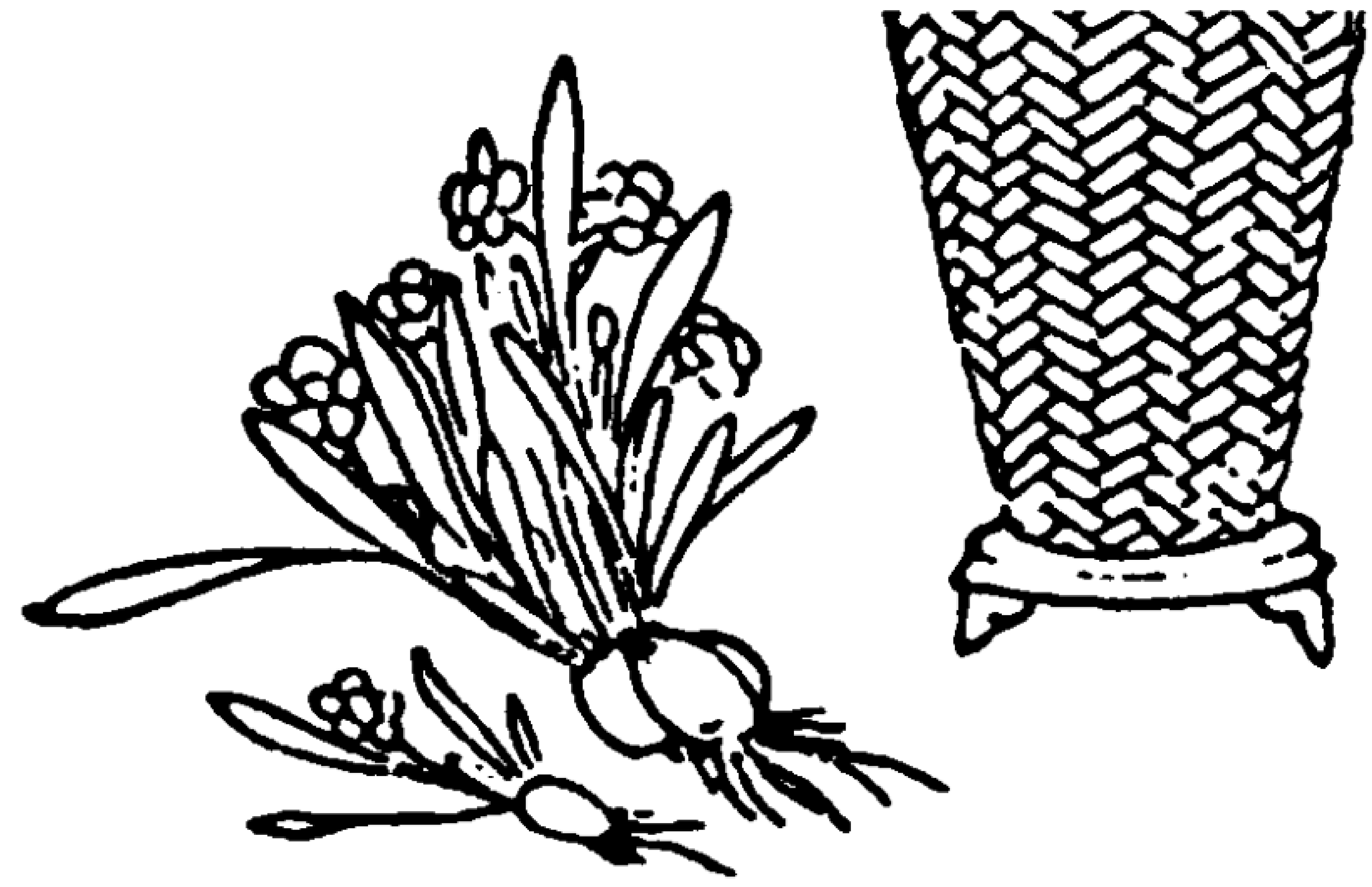
くろがねのみちをたどりてむしけぐるま
海の外さへかよふべらなり

おなじものゝ中に、電信といふ題を

はりがねのいとのたよりのなからずば
けふのおとづれ今日きかれめや

なに、まつたく、こんなものは、わけのないものでござる。誰かのに似て居るッて。お默なさい。當世製造の數千萬のヌタ、夫、誰かのに似て居ざる若干かある。

霞めるそらにみえわたるかな



落梅風　　佐々木高行

我庭(わかには)にとなりのうめのちりくるは
そよふく風(かせ)のなさけなりけり

春夜雨　　鍋島直大

しつかにもふる春雨(はるさめ)のおときゝて
夢(ゆめ)ものとかにむすふ夜半(よは)かな

長閑なる日濱邊に出つ　　津輕承昭

濱風(はまかせ)もなきてかすめるはるの日(ひ)に

…かまし
谷光尊

雨中春草　　岩崎勝從

道(みち)のへのさゝれの[illegible]

まし
光　尊
かせ
嚴　夫
かな
久　政
はら

雨中春草　岩崎勝従

道のへのさゝれのひまの小草まで
いろまさりゆくはるの雨かな

月前帰鴈　蜂須賀随子

故郷になにいそくらんかへるかり
はなのみやこに月をのこして

河上春月　鍋島榮子

夜やふけしかはづなきたつ我門の
小川にうかふつきのとけさ

橋邊柳　前田朗子

村 [illegible] 子

ひにけり

部 磯 子

の一むら

村 重 子

るかな

憫然に思召され、天皇皇后兩陛下より、罹災者救恤として、金五百圓を下賜せさせ玉へり、右に付、森田臺灣課長は、過日宮内省に出頭し、田中宮内大臣に面會、御禮執奏方を請へりといふ。

●年金下賜　帝室より、美術奬勵の爲め、是迄年金五百圓を日本美術協會へ下賜ありたる處、昨年にて滿期に付、今回、更らに宮内省より、同會へ尙特別を以つて、明治三十四年より向五ケ年間

御沙汰ありた

に依れば、同殿下には、多分來る四月下旬ごろ、

御分娩あらせらるゝ[illegible]

沙汰ありた
避寒中なり
午前一時十
武官長、中
官等供奉、午
あらせられ
度局長、稻
官、安樂警
奉迎したる

に依れば、同殿下には、多分來る四月下旬ごろ、御分娩あらせらるゝ由にて、御降誕後七日目を以て御命名の御式を行はせられ、其れより四十三日目、即ち、御降誕より五十日目を以て、初御參内と稱し奉り、兩陛下へ御對顔あらせられ、次で、賢所皇靈殿の御參拜あり、御歸殿後群臣百僚の參賀を受けさせらるゝ御次第なりと承はりぬ。右の御順序は、既に、畏き邊に奏上、其々御裁可相成りたりと。

●賢所奉告　東宮妃殿下御着帶に付き賢所

同日午後一

品。

御滯在中の常宮殿七時四十一分られ、新造軍艦に新橋發の列車御歸邸あそば女王殿下には

月十七八日頃、定相成りたるに

環　御帶上金具各二個　金銀盃十五組は皆御意匠に成り、御指環、寶石のみにて菊花を作り、御帶止金具は、金屬と寶石とにて、葡萄の蔓と葉とを作り、大小多數の眞珠を寄せて實とおせしもの、又、金銀盃は、殿下の御寫生畫帖中より選みて、各名所古跡を彫刻せしものにて、優美高尚いづれも美事に出來したるが、右指環中、一個は侯爵へ贈らせ給ひ、金銀盃は、宮家及び侯爵家の家令其他へ下賜せらるべき御都合の由にて、其他の御調度も、

る梁川まで赴きて、得來りたりきとぞ。其の他、

七八日頃、
成りたりと
木村大字川
)の兩人は、
能く仕へ、
老母は、四
りて、病床
とより、衣
婦は、懇に

る梁川まで赴きて、得來りたりきとぞ。其の他、夫婦の孝養、皆、人を感せしむる事のみなりしより、老母が死亡したる翌日、近隣にては、その遺骸に、奇瑞現はれたりなど、噂立つに至れりとぞ。

●孝子　尾州中島郡牧川村、大字野田の加藤仁八郎と云へるは、幼年の頃より孝心深く、老母が、十年以前より病に罹り居るを、晝夜怠りなく看護介抱し、今日初老に及びしも、他人が入りては、自然、親和を缺くべきの虞れありとて、妻をも迎へず、老母に孝養を盡すこと十年一日の如くなり。

同家に於て實直
家を辭して停車
る夜も風の吹く
柄出すも、何樣
一本にて過ごす
加へて、一昨年
起ち居も自由な
又、妹は眼病
習はしむる等、

濱等の志士と共に、國事に奔走し、具に、艱難を
嘗めて、維新の大業を翼け、明治の初年、新舊事
物の變替に際して、人心は輕佻浮華にながる、時、
はるかに國家の前途を慮り、日本主義國粹保存
の教育の必要を認めて、學校を興されたる、故山
田時章氏の駿河臺なる與風女學校は、爾來二拾年、
其の主義によりて、幾多の淑女を養成せられしが、
こたび、更に其の規摸を擴張し、高等女學校程
度の課程を授け、多數の學生を入學せしむる計畫

開校以來その
行するに至れりと。まことに、愛でたき

之と競

開校以來その
て監督し、家
町二丁目に
開始する由。
識を涵養し、
びるにありと
物、造花、刺
して普通學を
り設けたり。

行するに至れりと。まことに、愛でたきことなり。

一ツトヤー　人のつとめは多けれど
　　　　なさけ心をもとゝせよ〳〵

二ツトヤー　ふたゝびかへらぬ命をば
　　　　君に捧ぐるますらをは〳〵

三ツトヤー　見るもあはれやいくさ場の
　　　　此ますらをの手おひをば〳〵

四ツトヤー　四方濤なる日本國
　　　　其國民は勇と仁〳〵

五ツトヤー　いくさするのも國の爲め
　　　　赤十字業も國の爲め〳〵

六ツトヤー　娘をもてる親達は
　　　　看病學も教へおけ〳〵

七ツトヤー　[illegible]涙の多き人々は

文書式

題

住所
姓名

……、……。……、……。……。
……、……。……、……。……。
……、……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは書とす。

○女子は、なにひとにても、随意に投稿することを得。

雪をつみほたるあつめしいくさせの

光…

艶子

でして

龍子

雪をつみほたるあつめしいくさせの
ひかりぞ今日はあらはれにける　伏脇よれ子

うれしさにいもがおくりししるし[illegible]
なきはゝそはのはゝにたむけつ　屋舗すゞゑ子

こゝろしていよ〳〵みがけ君がねし
よにたぐひなきたまのかず〳〵　眞鍋直子

世のはるをあだにはさかぬ花の木の
實のなるほどやいかにめでたき　河原芳子

あさゆふにおほしたてゝし庭さくら
けふのさかりを見るぞたのしき　坂倉峯子

ちござくら小枝がすゑもはるにあひて
まなびのにはににほふうれしさ　穂積[illegible]子

手折り得し月のかつらの香をそへて
まなびのはなもにほふ今日かな　松尾せい子

ころもぬふ糸まにはみよゆるされて・
まなびのにはに手をるそのはな　森田さも子

けふいはふ文のはやしはまだひくし　河合継子

中川芳尾子
りぬ
三井須磨子
けれ
清水田鶴子
けり
田代綾子
から
佐々小夢子
せよ
佐々有郷子
はな
福原菫子
て
まで
谷山さめ子
した

きみやかへるさ待ちわたるなり

たらちねのよろこびよりも中なかに
きみが心をおもひこそやれ　北島松子

山坂のこゝしきみちをたどり行きて
高ねのかつらきみやたをりし　北島功子

千代かたれ君はのきはのうめよりも
ふみのはやしになほさかねつゝ　瀬戸ゑい子

霜ゆきをしのぎてはやもさくはなの
たかきかをりをみにはしめけん　田中嘉鶴子

われもまたこゝろうれしく祝ふなり
まなひのみちをたへしきみゆゑ　椎野秀子

しもゆきの冬もしのぎしきみなれは
かゝるのどけきはるもきにけり　椎野清子

またれけりふみの林をこねわさも　椎野薫子

窓の雪ほたるのひかりあつめく
まなびしるし…　田川…

山こめ子
津玉子
戸そて子
村いそ子
川はま子
上友代子
谷川せい子
井いき子
田まつ子

窓の雪ほたるのひかりあつめく／＼
まなひししるしあらはれにけり　田川みさを子

朝ゆふにはけみししるしあらはれて
さかゐもしろきにはのひめまつ　好塊すゝ子

たまぼこの道のおくまでおしへくさ
つみわけにけるけふぞうれしき　駒澤まつ子

三月二十日兼題
旅たつ人を送る文

天　大阪市東區道修町四丁目　高安やす子

惜しむにとゞまらぬ月日は、はかなく流れて、はやくも、わかぬ君に、別るゝけふとはなりぬ。春のあしたは、たもとつらねて、よしのゝ山に、香細(かぐは)しき花をかざし、秋の夕は、なみゐて須磨の浦こ

倉かね子
り候。昨日は、
御支度も候ひけ
され度候。今朝
車までの、御送
昨日も申上し、
おり、心を痛む
ひしかど、老の
にて早速參れよ
御許様への失
へ候にも、今…
せめてはと、か

今日の御交りの、さながらなるやうにと祈りつゝ、此文をばしたゝめ申し候かしこ。

人

越後國岩船郡鹽屋村　野澤ちか子

草枕旅にしあれば何事もあれど、ひたすら憂きことをのみ書きつらね候ひし旅の日記も、大御代のめぐみには、たゞ、古は、かくもありけむよと、かたみに、樂しう讀みふけりしが、さすがに、わが親しき御方の、今日明日旅立たせ玉ふと聞きては、そゞろ御途の程のいかゞおはすらむと思ひやられ候も、おろかなる例の心がらなればにやと、且つは恥入り候。たゞ、何事にも心を用ゐさせ玉ひて、

くれぐ〵も
はこのこと

（到着順）

脇米子

將た夏を、想ひ
月を詠め、猶汗
手かで故郷戀し
ては心置なき友
れば、斯る情に
故郷にうづくま
泣いて女子をや。
も、山又山、海
婦はんことの、雖
、如何聞ゆ上げ

れて、悲しう別れ難くなん。あはれ旅立ち給ふ方は、遠き吾妻の果と聞く、さても今よりは、其方の空のみ眺められて、袖の濕ひ、秋の草葉も啻ならざらめ。

「天か下はなれぬ今の別とはおもひかへせどぬるゝ袖かな」

取り殘さるゝ妾が胸の中、手かで推しはかり給はれかし。何なかなと思ひしかども、悲しさ嬉しさとり集めたる心には、それと思ひ當るものも無き儘、妾が年頃手ならせし鏡一面に、日頃ものしし寫眞一葉添へて、形はかり捧げ參らす。因みし心の程、推しはかり納め給はれかし。なほ申上ま欲しき事澤なれど、名殘惜むと立ち舞ふ雲の、紙の面、筆の穗先に、漂ふものから、やむなく擱きつ。

御身健かに、旅路ことなかれかし。出で立ち給ふ先は、氣候風土の變りあめれは、萬厭ひて、露心許し給はざれかし。折節の消息を、大旱に雨含みたる雲待つが如き、妾を忘れ給はざれかし。さは取り集めたる所にこそ。亂れたる文に、亂れたる胸の騒ぎ、推しはかり給はれかし。悲しめでたし。めでたし悲し。かしこ。

屋舗鈴枝子

一鍋直子
こせ玉ひ、そのあた
ふよし。いかに、み
も、いとく、御
ひ侍るべきを、か
しからぬものには
御かへりを待て、
くこそ。かしこ。
原芳子
たよりにきこゆは
ごやかなる御語ら
らんを。近き日、婿
まふと、洩れきこ
べれ。御道草の程

いとゞ、御羨しう存上候。此頃は、御兄君様も當地に渡らせ給へは、御兩親様にも御心強くおぼすらむ。呉々も御自愛遊ばされ、日頃志し給ひし業を卒へ給ひ、この里のおもておこしとなり給ひてよ。なほ、花の朝月の夕昔を思ひ出で給はゞ、御音信たまはり度候。御途すがら安らかに、かの地に着かせ給ふをのみ、影ながらいのりまゐらせ候。かしこ。

新井登代子

いよ〳〵あすなむ、立たせ給はむ由、かねて承知の事ながら、今更に、悲しうなむ。御元様とは、ふり分け髮の昔より、學びの窓も共に通ひ、はらからもたゞならぬむつみあひ、たらはぬ我を、何くれとなく、導き給ひし嬉しさよ。誠に、御元様をのみ、杖とも柱とも賴み、行末ながく、御教うけまつらむと樂しみ居しを、いかに御修業の爲めとは申ながら、今、別れ參らする心、堪ふべくもあらず。實に、交りの深き程、別るゝ折の悲しさかや。御元様には、之までたらちねの御膝元にありて、世の荒浪などは、

、いかに心細う御氣を付け給へは、いかに君をれたのみ、今よつけてたらはぬ申度事は數々侍こ。

藤　芳　子

遠き西の都へ上り、學びの道にの名たゝる學校にか進ませ玉ふお羨しうも思ひべきことには侍師の君のみもとぎりつ、　はらたらはぬ姿に、

て申すまでには候はれど、油斷大敵と申ことに、よく／＼心し玉ひて、ゆめ／＼惡しき習はせに染み玉ふことなく、又、暑さ寒さのみぎり／＼には、よくいとはせ玉ひて、たゞ一すぢに志す方に勉められ、深奥き文の林に、うまず撓まず怠らず、もゝの艱難ちぢの辛苦も忍ばせられ、我身の光り心のひかり、みがき磨きて、やがては、めでたくにしきまとひて、歸りまさむこと、指折りかぞへて待居申候。かへす返すも、都のちりひぢにおまみれ遊ばしまさぬやう祈入候。先は右申上度迄、あら／＼かしこ。

佐々有鄰子

周防なる岩國山をこゑん日はたむけよくせよと、歌ひしむかしの人のあとをしたひて、九州鐵道の汽車より門出なさるを御君には山陽鐵道をものらせたまふよし承れば、さだめし、岩國あたりの山河も、右に左にかへり見たまふことゝ。心ゆく長き旅路なるべけれど、むかしは、三十日あまりも。日數をつひやしつゝといふなるものを、二三晝夜のうちに、東京につきますべけれど、手向よくして、心しづかにゆきつきたまひてよ。あなかしこ。

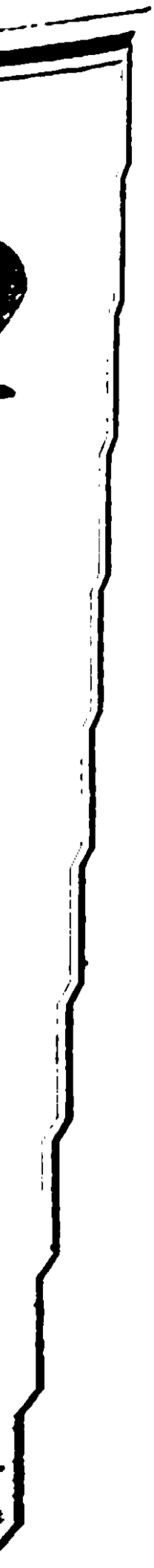
福　原　菫　子

に就かせ玉へかし。
。

南　保子

し由にて、あなた様
目出度なん。さりな
學びの庭に教草摘み
に出で丶、共に物學
出でられ、一しほ御名
たぬ片羽鳥の山里に
してか浮世に出でん。
らに、いさゞ物あは
世にては侍れど、な
折々は、都の御様子
のあしのいさしげ丶





學を許
に履歷
四年級
素若質を
旨とす

●女生徒募集

現則入用の向は郵券貳錢を送るべし

今般規則を改正し來四月十一日より新學年を開始す

入學志願の向は同月七日までに申出づべし

●入學程度

高等小學二年級以上卒業の者若くはこれと同等以上の學力を有するもの

●本科

修身、國語、漢文、外國語、歷史、地理、數學、理科、家事、習字、圖畫、裁縫、體操（以上正科）音樂、點茶、

溝口鹿次郎氏が算術の比例より始め開平開立を講ず進んでは代數の初
に付き第一期に講じたる日本の部を總括し猶時日あらば外國の大要を講ず
半過ぎたる後を承けて講ず
付き日常會際に適切なるものを講ず
校教師小野鶚堂氏が日用の書簡文を認め示す
猶餘時に教授上の注意をも述ぶ
教諭藤堂忠次郎氏が幼兒以上の家庭教育の話をなす
便利をはかる
す
丶掲載す
者もあり、第一期分講義錄も御望の方あらば何時たりとも全部發送す、

子講習會　發賣所　東京京橋區南傳馬町一丁目　吉川半七

紙面改善廣告
日布し、

紙面改善廣告

し、國體を顯彰し、士氣を勵まし、風俗を敦大抱負を持して現れたる本誌は歲を閲みす三有、號を累ぬること實に二百十二號其の間實質に非常なるものありしと雖も、本誌の表に卓立し、關與する所なく、羈束せらる終一貫以て一片耿々志を伸へんことを務め數年、內外の趨勢急速變轉の影響は、人心法にのみ存し、國家の拠りて以て立つ所養するを顧みず、忠孝仁義士道相魂、凡て想の特色本領は、年と共に愈々益々衰とす。時邦家將來の事、眞に焦慮に勝へざて茲に至れば吾人の責任は更に一層の重きを覺ゆ。吾人不肖なりと雖ども茲に今日の此

…會社國光社印刷部印刷